

大通公園を望む窓辺から

東京オリンピックに寄せる もう一つの私の期待

会長 長瀬 清

今年8月東京で開催されることになっていたオリンピックは、昨年末、中国湖北省武漢市に発し、瞬く間に全世界に拡散した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)により頓挫、一年延期となった。

オリンピックに照準を合わせ、長年努力していた多くのオリンピック選手の夢とやる気が打ち砕かれそうになったが、一年延期と決まり、新たな目標を定め多くの選手は更なる成績向上のため努力を継続している。

昨年、オリンピックの華であるマラソン競技が東京の暑さを回避し、札幌での実施と決定した。一年延期となった来年も変わらず札幌で行われる。マラソンのコースについては多くの意見があったようだ。毎年行われる「北海道マラソン」のコースが有力な候補として挙げたが、長い単純な直線コースがあり、走るには楽であるが、レースの駆け引き、配分が難しい、景色の変化がない等、問題が指摘され、種々検討の結果最終決定に至ったという。決定の大きな要因は、景色がテレビ映りの良いコースというのが決め手だったようだ。スポンサーである米国のテレビ会社の撮影者の見立てであったと聞く。その中で、主要な場所が道庁の赤れんが庁舎、大通、そして北大構内を含めるというものであった。

これまでのオリンピックで大学の構内がコースに取り入れられたのは例がないと聞く。しかも、男女3回合わせて6回構内を疾駆するというのも異例だ。これで決まりとなれば、日本は勿論、世界中の多くの人々がテレビを通してコース周辺の景色を目にすることになる。何億人もの人の目に、マラソンランナーの姿と共に北大構内の景色も焼き付けられる。その結果、沢山の木々に囲まれた自然豊かな北海道大学で学びたいと多くの若者が北大を目指して来てくれるのではと、オリンピックの開催を期待を込めて待ち望んでいるこの頃である。

いま、北海道では第1波、第2波のCOVID-19の波を乗り越え、安堵したのも束の間、第3の波に見舞われている。よほどの強い手を打たなければ大変なことになりそうな状況にある。悪くするとオリンピックの夢が飛んでいってしまうかもしれない。オリンピックが夢で終わらないように祈っている。

名字

理事 松家 治道

このごろ、NHKのバラエティ番組、「日本人のおなまえっ!」を楽しみにしています。この番組は、例えば「佐藤」が「左衛門尉の藤原」という職位に由来したものである、「鈴木」であれば、熊野地方の穂積氏の一族が、墓塚のことを当地で「ススキ」と読んだものに鈴木の子を当てた、などと古館伊知郎氏の軽妙な司会のもとで逸話が紹介されます。

さて私の松家って名前、なかなか読みにくいようで昔から良く間違えられてました。マツイエ、マツヤ、マツケなどで、その度「カラスの力」と訂正していました。

はるか昔の医局時代、自姓のルーツが四国と聞き、苫小牧からフェリーで徳島へわたり調べたことがあります。旧木屋平村(現美馬市)に、平 清盛の四男・知盛の後裔が源氏の追討から逃れて、剣山の森遠城に拠った木屋平氏が始まりだそうです。その旧木屋平村の民俗資料館には、南北朝期～戦国期の「松家家文書」と呼ばれる木屋平氏に関わる中世文書が今も残っています。

そして時が下り、豊臣氏の四国征伐で秀吉の股肱として知られる蜂須賀家政が、阿波国に入国します。木屋平氏はそれに反抗した土豪の鎮圧に活躍し、後にその褒賞として名字を賜ったとされます。蜂須賀氏は江戸時代には徳川氏より賜った「松平」を公称するようになりましたが、その「松」と、当主の家政の「家」と合わせて「松家」を与えられたと伝わります。その時期によっては「蜂家」や「豊家」だったのかもしれない。

私が子どもの頃は札幌から旭川にかけて松家姓は数件しかなく、現在は美幌市、釧路市に約30人、旭川市、苫小牧市に20人、札幌市中央区に10人とのことです。まだまだ松家一族の野望は天下に遠いようで、今回の菅政権の「脱ハンコ」の流れは、急用で三文判を探す苦勞がなくなりそうでうれしいです。

